

ハンセン病について

昨年8月下旬、岡山県瀬戸内市にある長島に行ってきました。瀬戸の穏やかな海に囲まれ、沖には小豆島が見える風光明媚な所です。この島には、二つのハンセン病療養所があります。想像を絶する元患者さんの悲惨な生活がそこにはありました。

ハンセン病は、らい菌に感染すると起こる病気です。発病すると、末梢神経がおかされ、知覚麻痺がおこり、温度や痛みを感じなくなります。その結果、やけどやけがを繰り返し、手足や顔面が変形する後遺症が残りました。有効な治療薬がない時代は、不治の病と言われていました。しかし、らい菌が発見され、非常に感染力の弱い菌であることがわかっていたにもかかわらず、住んでいた家を大がかりに消毒し、患者を強制的に隔離する政策を行ったため、ハンセン病はとても怖い病気であるという誤った認識を人々に植え付けてしまったのです。

療養所には、元ハンセン病だった方々が暮らしていらっしゃいます。その方のお話を聞く事が出来ました。強制的に療養所に連れてこられた際、入所した人の数があまりにも多かったため、治らない病気であり、一生ここから出られないのかと愕然とした話、患者同士の結婚は許されたが、子どもを産むことは許されず、強制墮胎や断種が行われた話、死んでも故郷の墓に入れない話、聞いていてとても心が痛みました。また、自分がハンセン病患者になったことにより、兄弟が離婚させられたり、家族が近所付き合いから疎外され、就職を拒まれたりしたのです。このような許されない人権問題が起きていたのです。

ハンセン病は、現在、確実に治療できる病気であり、日本での発病者がほとんどいない状況です。しかし、まだまだ、差別は無くなっていないのです。ハンセン病を完治した後、社会復帰し、結婚した後過去を打ち明けたら離婚になった人もいます。また、療養所見学を予定していた人に用があつて職員の方が電話をしたら、その奥さんから「そんな怖いところに主人を行かせないでください。」と言われたそうです。これは、今年の夏の話です。

元ハンセン病患者の方が、「子ども達に、ハンセン病はうつらない。ハンセン病はこわくないということを知らせてほしい。」と言われました。どれほど苦しい思いをしたか伝わってきました。人権の大切さを、正しいことを知る大切さを改めて考えさせられました。

ハンセン病について **どんな病気？**

ハンセン病とは、「らい菌」に感染することで起こる病気です。現代において感染することも発病することもほぼありませんが、感染し発病すると、手足などの末梢神経が麻ひし、汗が出なくなったり、痛い、熱い、冷たいといった感覚がなくなることがあり、皮ふにさまざまな病的な変化が起こったりします。また治療法がない時代は、体の一部が変形するといった後遺症が残ることがありました。かつては「らい病」と呼ばれていましたが、明治6年（1873年）に「らい菌」を発見したノルウェーの医師・ハンセン氏の名前をとって、現在は「ハンセン病」と呼ばれています。

感染症だけどとてもうつりにく病気

早く見つけて適切な治療をすれば治る病気

ハンセン病問題の歩み

差別の始まり ●中世～近世	体の一部が変形したりする外観の特徴などから偏見や差別の対象にされることがあった。
患者の隔離政策 ●1900～1940年代	患者を強制的に收容し、療養所から一生出られなくする「ハンセン病絶滅政策」が行われ、偏見や差別が一層助長された。
治療薬の登場 ●1940～1996年代	有効な薬が開発され、治療法が確立されたが、患者の隔離政策はそのまま継続された。
「らい予防法」廃止 ●1996年～	「らい予防法」が廃止され、患者隔離政策に終止符が打たれた。

ハンセン病療養所 **日本には14カ所あります。**



岡山県瀬戸内市にある長島

長島愛生園

邑久光明園

邑久長島大橋

「長島愛生園」
昭和5年、日本初のハンセン病療養所が、岡山県瀬戸内市長島に設立された。国の隔離政策により、医療と生活をこの島の中で生涯送ることになる。

「邑久光明園」
大阪の療養施設が室戸台風により全壊したため、代替地として昭和13年に設立された。

「邑久長島大橋」
『人間回復の橋』と呼ばれた。昭和63年(1988年)完成。本土からわずか30mの距離だが、偏見と差別の壁のため、長い間橋は架けられなかった。

(写真) 山口県健康福祉部健康増進課「ハンセン病を正しく理解していますか？」より